

4.7 個別の教育支援計画作成に向けての ICF 活用の試み

福井県立南越養護学校 教諭 米澤礼子

1. 本校の個別の教育支援計画策定における課題 — ICF の活用の背景 —

福井県立南越養護学校には、知的障害、肢体不自由、病弱のある幼児児童生徒が在籍しています。現在、私たちは、研究テーマとして「一人一人の豊かな生活をめざした授業づくり」を掲げており、全教員がKJ法の考え方を参考にして話し合い、子どもたちの豊かな生活を培うために必要であると思われる7つの「南越っ子生きる力」(図1の「南越っ子 7つの生きる力」)を設定しました。このことは障害があってもその子らしく堂々と歩いていくために、一人一人にどのような力を育てていったらよいのか、目標を設定していくもとなる指標と考えています。

この「南越っ子生きる力」は、個別の教育支援計画の長期目標を立てていく中で取り入れられていますが、「子どもたちの豊かな生活をめざした」個別の教育支援計画を立てていく上で、課題に思っていることがあります。

一つ目の課題は、「本人の願い」、「保護者の願い」と学校における「教育的ニーズ」との関係です。本人や親の願いと学校が考える教育的ニーズが異なる場合は、どう考えていくのでしょうか。

二つ目は、支援目標を立てる上で鍵になる実態把握の在り方です。明確に実態把握ができるチェックリストはないだろうか、と考えましたが、求めているものは、「障害による学習上又は生活上の困難」ではなく、「その子らしく豊かに生きる」ことをめざして何が必要かが見えてくるものです。

三つ目は、目標を達成するための他機関との連携の在り方です。

金沢大学の吉川一義氏の著書や講演に接し、ICF理念とモデルを教育支援に適用するにあたっては、本人の願いと現実(実態)との間に生じるずれに対し具体的な努力事項(目標)を設定し、本人の実行を関係者が連携して支援することで問題解決につながり、自己実現を図ることにつながっていくことが分かりました。主体である本人の「こうしたい」という気持ちを大切に受け止め、具体的な実行場面を設定していくことで自己肯定感につながっていくことは、私が求めている「その子らしく豊かに生きる」とつながるのではないかと思いました。

このように、「本人・保護者の願い」、「その子らしく豊かに」、「他機関との連携」の3つの課題を解決する方法としてICFの活用を考えてみました。

2. ICFの活用の実際

同じ学級の教師3名で話し合いながら、担当する学級児童の[ICFシート](図2)を作ってみました。

(1) 本人の願い、親の願い

保護者の願いは、毎年、年度の始めに聞き取りを行っていますが、本人の願いは、というと知

的障害のある子どもたちが言葉に出して自分の願いを伝えてくれることは難しい場合が多いです。そこで学級の教師で話し合い、本人がどのような気持ちで日々活動しているかを本人の行動から推し量り、代弁する形で書いてみました。

(2) 実態（ICF関連図の活用）（ICF関連図は、[ICFの構成要素の相互作用]の図の考えを基に、子どもの実態を把握し整理するため、南越養護学校で作成した様式）

「本人の願い」を基にそれに関連する、健康状態、心身機能、活動、参加、環境因子、個人因子を書き込みました。このICF関連図をもとにして、足りないところを補うなど学級の教師間で盛んに話し合うことができました。

ICFの分類項目を観点としながら個人に即して実態を捕捉していくことで、個人の生活機能に対する偏った捉え方を減らすことができました。また、学校という立場上の偏った側面からの見方のみでなく、医学的な立場等から見ると共通の言語で取り上げることができ、機能障害等の分類で認識を新たにしました。

(3) 実態を総合的に見た担任の思い

上記の(2)の実態をもとに、(1)で提示した本人や保護者の願いの実現に向けて、自信を持ち意欲的に取り組んでいくための支援の方向性を確認し合いました。「実態を総合的に見た、担当者の思い」という欄を設け、担当者における支援の方針を記入しました。

(4) 具体的な目標到達点

方針が学級内で話し合われると、それを受けて目標を立てます。抽象的な目標でなく本人や周囲が実感できる、より具体的な到達点を考えることにしました。またそれを受けて、今年度1年間の短期目標を立てました。

(5) 実行場面

短期目標を達成するための具体的な支援場面を挙げていきました。個別に行う内容や学級の集団活動の中で行う内容、学校教育活動全体で行う内容等が挙げられます。

また、目標に向けて保護者や関係する外部機関が、どのような支援を行うかについて、保護者との懇談や外部機関との連絡会にこのICFシートを使用して相談を行う中で、本人の生活に即したよりよい支援場面を設定していくことができます。

具体的支援を実行し振り返る際には、目標と照らして本人の生活実態がどのように変わったか、評価していく必要があります。そして、その結果をもとに本人が自分に自信を持ち、主体的に取り組んでいるか、つまり本人の内面の成長を評価していくことが大切であると思います。うまくかみ合わない場合は、支援方法を見直し、さらには目標の見直しを行っていきます。

これらを通して、具体的な支援策、実行場面を明らかにし、「本人の願い」に沿う目標に一步步近づけようとする中で、自分に自信がもてる子どもを育てることにつながっていくと思います。

3. ICFの活用を試みて — ICF 活用の成果と課題 —

一つ目の課題であった「本人の願い」「保護者の願い」と「教育的ニーズ」の関係では、「本人の願い」を十分に汲んでいくことから、「教育的ニーズ」が何であるかを見出していくことが、大切なことであると思いました。支援の方向性を話し合う中でも、本人の気持ちに寄り添うことを貫いていくことで、成就感を味わわせることができ、自己実現を可能にする「豊かな生活」に導いていくことができると考えます。

二つ目の課題の「実態把握」について、ICF 関連図を用いることにより、一つの願いに関して様々な角度から本人を見つめることができ、またそれをもとに学級の教師間で検討し合うことができました。この話し合いや作業に時間を費やしましたが、「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」を立てる際には、柱となる「どのような力を」「どの場面で」つけていくか方針が定まっていたため、スムーズに行うことができました。

一方で、この活用を試みる中で難しいと感じた場面を紹介します。図2で紹介した対象児の家庭保護者は大変熱心で、病院で行われている言語教室や聾学校で受けた助言を翌日の連絡帳で報告があります。早速、保護者に機会を設けてもらい、個別の教育支援計画とICFシートを持って保護者と共に言語聴覚士と打ち合わせを、と思いましたが言語聴覚士の方針を一方向的に聞いて帰ってくるのみとなってしまいました。言語聴覚士の方針は、病院の医師の方針、すなわち保護者が最初に受診した際に医師に述べた言葉に基づいていることに後で気づき、保護者に現在の状況は異なることを伝えてもらうことにしました。外部機関と同じ方向を見て行くには、絡まった糸をほどこような様々な手続きが必要な場合があります。

けれども、本人のことを一番よく理解している保護者と学校が連携し、これら外部の専門家の意見を取り入れながら、同じ目的に向かうことは可能であり、そのためにも今回学級で作成したICFシートを活用していくことが効果的であると感じました。

三つ目の課題の「他機関との連携」の在り方を改善していく上で重要な役割を果たしていきま

す。

ICF 関連図を用いて一人の子どもを見ていく中で、これまで気づかなかった多くの可能性に気づき、本人に対する捉え方が変わりました。ICF の理念は、従来とは大きく異なる障害観であると思います。学校がこれまで向かってきた方向を大きく変えていかなければならない点もあり、また卒業後に子どもたちを受け入れる社会にも変化が求められていると思います。

その過渡期において、自己を肯定し、自己の目標をもてる、そしてその目標に対して前向きに進んでいける子どもに育てていくことを後押しするICFの活用法について今後も学んでいきたいと思

参考文献

吉川一義 (2009). ICF 理念とモデルを教育支援に適用するにあたって. 特別支援教育とICF, 金沢特別支援教育ICF研究会編, 16 - 25.

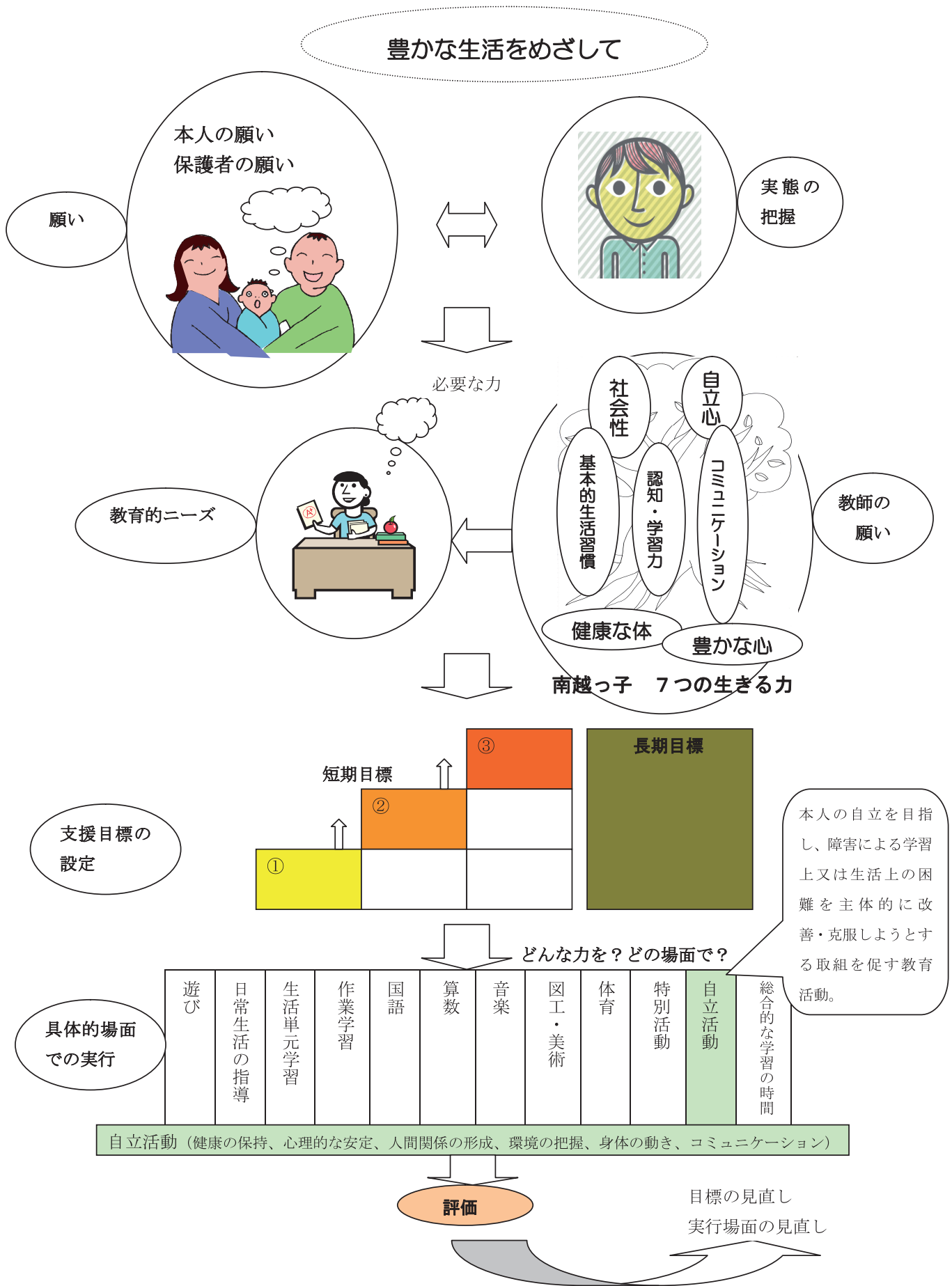


図1 豊かな生活をめざして

(1) 本人の願い



ぼくのやりたいことがわかってほしい。

親の願い

コミュニケーション能力を伸ばし、周囲の人と意思が伝達し合えるようになってほしい。

(2) 実態

健康状態

ダウン症、伝えたいことが周囲に伝わらないことによるストレス

心身機能

- ・視覚機能
- ・聴覚機能
- ※状況の視覚的理解の支援を要する。
- ・構音機能
- ・高次認知機能
- ※予期予測のための支援を要する。

活動

- ・皆の前で発表することを好む。
- ・音声言語で話す言葉は限られ、何かのできごとを伝えようと話す、周囲(学校や家庭に人)に理解されない。
- ・話している人に注目していない。
- ・ひらがな50音が読み書きできる。(発音できない行がある。)

参加

- ・自分で状況を考えて行動するが、勘違いもある。
- ・トイレや他の教室に行く時などカードや言葉で教師に伝えることもあるが、面倒で行わない時もある。

環境因子

- ・伝えたい相手・家族、学校の友達、教師
- ・補助具(写真カード、文字カード)
- ・言語教室 月2回
- ・補聴器(聾学校にて指導を受ける。常時の装着が難しい)

個人因子

- ・友達や教師に対し、手伝ったり、ちょっかいを出したりすることが好き。
- ・何事にも意欲的。
- ・注目されることが好き。

(3) 実態を総合的に見た、担任の思い

- 本人が周囲に伝えたいことがうまく伝わり、伝えることの喜びを感じ、行動する前や後に、より伝えたいという意識をもってほしい。
- 本人が面倒くさいと思わない方法で、伝え合う方法を習得していくことが必要。

(4) 具体的な目標到達点

- ・自分がこれから行いたいことを伝えることができる。「これから〇〇をしたい」
- ・伝達場面での状況や相手の反応に気づくことができる。
- ・先行教示を理解する。「次は〇〇をする」
- 今年度の目標**
- ・サインや音声言語で自分のやりたいことや楽しかったことを周囲に伝え、伝わったことがわかる。

(5)

<p>実行場面① 自立活動(個別) ・スケジュール表 自分で書いた予定を発音し、活動と名称を確認する。</p>	<p>実行場面② 国語(個別) ・50音の発音 文字を確認しながら発音する。 音にサインをつけて補う。</p>	<p>実行場面③ 帰りの会(学級)・発表 今日楽しかったできごとを発表する。</p>	<p>実行場面④ 自立活動(学級) ・楽しい体験 印象がもてるような体験をする中で、人に伝えたい気持ちをもてるようにする。</p>	<p>実行場面⑤ 自立活動(個別) 補聴器が正しく使えるようにする。(聾学校と連携)</p>	<p>他の機関 言語聴覚士との連携 形容詞や動詞などの語彙の増加。 正しい発音のし方</p>
--	--	---	--	---	--

評価

- ① 日常生活での状況理解や伝達行動の変化に関する評価
- ② 伝達意欲・方法・内容の変化から内面の成長に関する評価

目標の見直し
実行場面の見直し



図2 ICFシート(小学部A児)